

香川大学教育学部における初年次教育の改善

小方 朋子¹ ・ 植田 和也² ・ 松下 幸司³

キーワード：初年次教育、実地教育、郷土の教育的資源、見直しと改善、運営体制

1. 実地教育における初年次教育の重要性と問題の所在

大学設置基準大綱化以降の学士課程一貫教育体制への志向などを背景として、近年、大学では初年次向け科目が開設されるようになってきており、2008（平成20）年の文部科学省中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」においても、大学における初年次教育の重要性が取り上げられている。その審議のまとめによれば、初年次教育とは「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」であると定義されている（中教審，2008）。また初年次教育においては、「大学生生活への適応、当該大学への適応、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入」などの要素を体系化することが求められている（中教審，2008）。

また、教育再生実行会議第七次提言（2015）では、「小・中・高等学校から大学までを通じて、課題解決に向けた主体的・協同的で、能動的な学び（アクティブ・ラーニング）へと授業を革新し、学びの質を高め、その深まりを重視することが必要」であると指摘されている。さらに、大学においては、「グループでの学修、プレゼンテーション、長期学外学修プログラムなど、学生が主体的に行動し、知識をいかす実践型・体験型の教育を導入することとともに、高等学校教育との円滑な接続のための初年次教育を充実する」ことが提言されており、具体的な改善や充実が求められている（教育再生実行会議，2015）。

そのように高等学校との円滑な接続が、内容だけでなく学び方を含めた方法的な面においても改善・充実が図られているところである。しかし、大学において今まで実施してきたカリキュラムや内容を改善していくことには、大きな労力を伴うとともに、他の授業科目や様々な面に影響を与える点からも容易でないことは周知の通りである。まして、一人の授業科目の内容であれば、自ら判断できる点も多いが、学部の実地教育や初年次教育全体の在り方を検討して改善することは、例え一部であっても大変なことである。そのようなことを踏まえた上で、学生の授業評価における声や担任会議等での意見を生かしながら香川大学教育学部の実地教育全体における初年次教育としての

1 特別支援教育

2 教職大学院

3 附属教育支援開発センター

位置づけや在り方を直近数年間の改善をもとに考察していきたい。

2. 他大学の特色ある取り組み

前述の初年次教育の重要性や充実が求められるなか、そこにおいて取り上げる要素例などを基に、全国の国公私立大学では現在どのような初年次教育の取り組みがなされているのか。文部科学省高等教育局が実施した大学における教育内容等に関する調査によれば、平成25年度現在、全国国公私立大学771大学のうち690大学(94%)で初年次教育が実施されている。また初年次教育における教育内容としては、「レポート・論文の書き方等の文章作法」が621大学(84%)で取り扱われ最も多く、続いて「プレゼンテーション等の口頭発表の技法」が560大学(76%)、「学問や大学教育全般に対する動機付け」が534大学(72%)、「論理的思考や問題発見・解決能力向上」が431大学(58%)で取り扱われていると報告されている。以上の文科省による初年次教育の定義やねらい、ならびに、初年次教育の教育内容動向をふまえ、他大学の先進的な取組についても概観し、特色ある取り組みのいくつかを挙げてみたい。

少し時期は遡るが、2009年度、全国の国公私立大学の全学部を対象に河合塾が実施した初年次教育調査の報告(河合塾, 2010)において「受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を促す」取り組みがなされている評価が高い4大学の取り組み事例が紹介されている。まさにこの学習態度の転換は、上に挙げた「大学での学問的・社会的な諸経験を成功」させることに繋がる、学習態度における「高等学校や他大学からの円滑な移行」プログラム事例と言えよう。

ここで興味深いのは、取り上げられている4大学の全てで、自己の学び(過去)を振り返り、これからの課題(未来)をまとめる過程を保障していることである。呼称や方法は4大学で様々であるが、[自分自身について振り返り、最後は今後の目標を紙にまとめて発表する(嘉悦大学)] [未来履歴書を書く(嘉悦大学)] [一週間の行動履歴・学習内容・課外活動・食事・睡眠・運動時間などについて記録し、最後に、1週間で努力したことや困ったことを記す「修学ポートフォリオ」を作成する(金沢工業大学)] [毎回の授業終了後、どんな力が身についたかをリフレクションシートに記入して振り返り、さらなるレベルアップのための課題を整理し記入する(三重大学)] [学期の最初と最後に学生自己分析シートを記入し、自己認識と自己成長を意識させる(高知大学農学部)] などの取り組みがなされている。初年次教育における学びを、「知識の獲得」「スキルアップ」だけに留めないために、また各授業で取り扱われるコンテンツの単なる獲得・収集作業にさせないために、受講生自らの過去の姿と結び付け、自らの成長を感じさせつつ、未来の自分像へと意識を向かわせる——すなわち学ぶ主体である「自己」の存在を常に意識させるとともに、自らの未来像と今学んでいる内容との関係性を、位置づけ意味づけることを積み重ねられるよう「振り返り書く」活動が日常のものとして配されているのである。

それでは特に、教員養成大学・学部の初年次教育においては、どのような取り組みがなされているのか。

福岡教育大学で2013(平成25)年度に行われた初年次教育では、試行実施「一年生塾」として、[小中学校の一日をボランティアとして体験・指導補助する] [約半年前まで自らが生徒として所属していた出身高校で、恩師の授業を実習生の立場で参観し、恩師の話を聞く] という学校現場訪問プログラムなどが実施されている。教員養成課程の新入生が十数年にわたって見ていながらも、十分理解していなかった「教員という職業」を可能な限り実践的に理解させることをねらいとするプログラムとして実施されており、文科省の定義における「学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させる」ために必要なライフプラン・キャリアプランづくりの導入実践であり、高等学校時代の恩師の授業参観と恩師との語らひは、高等学校時代の自分と、教員を

指す課程に身を置く現在の自分を繋ぐ、まさに「高等学校からの円滑な移行」を促す意識づけの取り組みと言えよう。

また島根大学では、初年次教育プログラムの基本達成目標を、「学ぶ技術に関する力(レポート・論文の書き方や文献の探し方、プレゼンテーションの仕方)」「大学生活を豊かにする力(他人と協調・協働して行動する力、大学で学ぶことや専門教育へのやる気)」として設定している。この指針に基づき、島根大学教育学部の初年次教育においては、「子どもたちに教える立場に立つためには、自らがその分野の専門家であることが何より大切」だとする見方から、教育学部にある様々な専門科学に幅広く触れて学びながら何を自分の主専攻/副専攻として選ぶのかを「きちんと迷って自分で決める」ための“入門期セミナーⅡ(必修)”や、入学後2か月半の時点で「先生の卵」として子どもたちの前に立つ“学校教育実習Ⅰ(1年次20時間)”などが開講されている。これらは、教師という職業を目指す動機や自己の将来像を確固たるものとしながら、教師という職業体験を通して知り、教師を目指す「4年間の学びを方向づける重要な最初の一步」として位置づけられている授業群である。なお、“入門期セミナーⅡ”“学校教育実習Ⅰ”のいずれの授業も、島根大学教育学部の卒業要件(必修)である『1000時間体験学修プログラム』の中に位置づけられており、このプログラムを4年間かけて作っていくための基礎を学ぶ1泊2日のセミナー“入門期セミナーⅠ”も1年次に別途開講されており、このセミナーもまた『1000時間体験学修プログラム』に含まれている。

それ以外にも、体験に関する注目すべき取組として、山口大学の「教職キャリア形成Ⅰ・Ⅱ」における教職体験の実施は、今後の参考にしたい取組でもある。特に、子どもや教職員とのかかわりにおいて学生が選択できるシステムや1回だけでなく継続的に体験できる仕組みは初年次の学生にとっても教職をめざす意欲の向上に寄与すると思われる。また、鳴門教育大学の1年次の学生全員が土曜塾として公立学校の子どもと関わるプログラムも大変興味深いものである。

以上、他大学における初年次教育の特色ある取り組みについて、本稿で取り上げた事例はごく一部であるが、いずれも、[これまでの自分]と[学び]を、そして[学び]と[将来の(教師という職に就く)自分]を、適切に・円滑に繋ぎ積み重ねるために、カリキュラム・教育方法・学びの機会・学習ツールの工夫が凝らされた、初年次教育の実践事例である。

3. 香川大学における実地教育の全体と初年次教育の改善

(1) 実地教育の全体像と初年次教育

本学における4年間の実地教育の全体構成を教職の基礎的理解から総合的な理解へと着実に力量を形成できるように教職支援開発センターを中心にプロジェクトチームとして再検討し、各学年においての主たる内容を学校理解・子ども理解・授業理解・教職理解と位置付けた(図1参照)。初年次教育のねらいとしては、実地教育の基礎となる部分で学校理解を合い言葉に前期の「大学入門ゼミ」や後期の「教職概論」の授業内容が見直されてきた。各学年の実地教育における内容は、よりよい改善を求めて、担当者の意見や学生の声を生かしながら充実を図ってきた。

特に、4年間の教職に関する学びの連続性や積み上げを考えるうえで、まず4年間の学びの見直しを持たせるためにも、初年次教育としての全学共通科目「大学入門ゼミ」と、教育学部の「教職の意義等に関する科目」である「教職概論」の2科目は重要であると考えた。この2科目をどのように関連付けるのか、年間を通してどのようにつなげていくのか、教職への意欲啓発の入り口の役割をどう果たすのか、また、内容として教員養成課程における初年次教育とは全学共通コンテンツに何を加えたらよいのか、つまり、大学生としての論理的思考力や表現力に加えて、教員になるための基本的なスキルとは何か、などについてWGで検討し、図1の通り「学校理解」をキーワードとして、1年次の年間のプログラムが完成した。

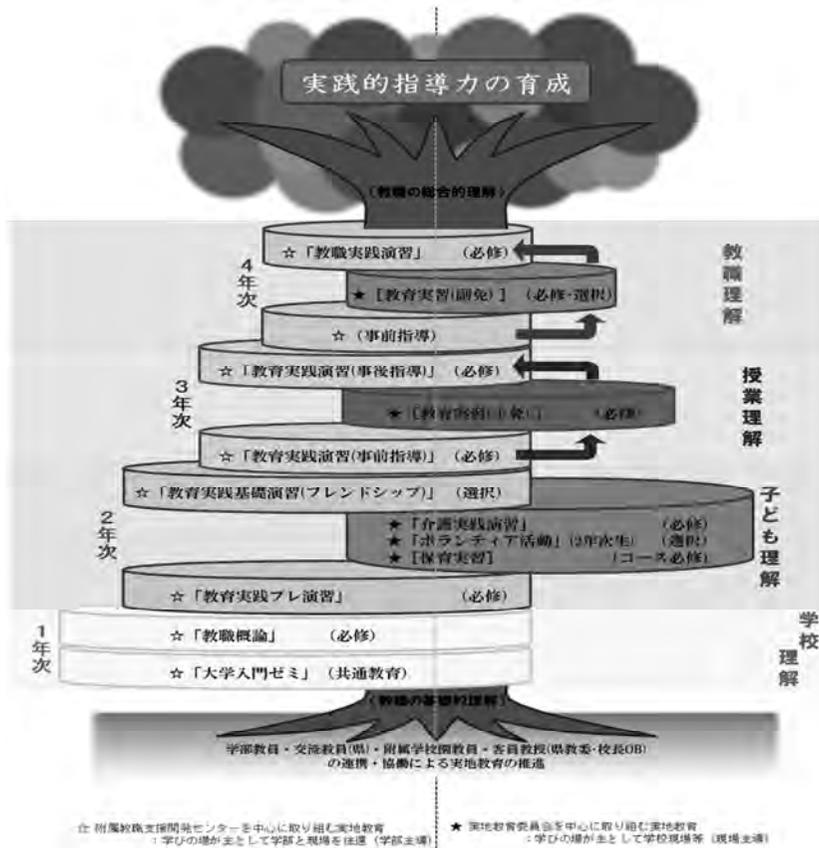


図1 4か年を見通した実地教育プログラムの全体構想

(2) 初年次教育の運営体制

これら実地教育の核となる授業科目の運営に関しては、ある一部の担当者や講座だけに任せるのではなく、各コース・領域から担当者を選出し、担当者会議を設定し、授業を協働的に構成するシステムを位置付けてきた。その際、教職支援開発センターの専任教員が学部の担当教員と連携を図り、コーディネイト役としての重責を担っている。

例えば、初年次教育における実地教育として位置付けている「大学入門ゼミ」と「教職概論」の授業担当者については次の通りである。

教員養成課程の1年生160名を7クラスに分けて、各クラスに各講座・領域から選出された教員が担任として1名ずつ、さらに3名の教員が2または3クラスずつの副担任としてサポートする。なお、この初年次の担任は学生が卒業するまで、アカデミックアドバイザーとしてサポートすることとなっている。つまり、2年次になり学生が各研究室に所属して、その後ゼミ担当の教員が決まることになるが、学生自身の様々な悩みや相談に対しても必要があれば気軽に尋ねていける教員がいるということだ。そして、全体のコーディネイト役の教職支援開発センター専任教員1名が取りまとめながら、担任会議等を開催して運営していく。平成27年度までは、全体のコーディネータ役をセンターの教員と学部の教員が協働で行ってきたが、学部改編や教職大学院の創設等により、厳しい人員状況のなかで体制を維持していかなければならなくなっている。そのような背景のなかでも、教員養成の柱ともいえる実地教育がセンターにお任せ状態にならないように、組織で取り組み

表1 学生に配布される実地教育に関わる主な冊子

年次	実地教育に関する冊子等	主な内容等
1	●教師になるための学びの計画と履歴 ●参観の記録	…教師に求められる5つの資質能力に関する振り返り …附属園校訪問に関する事前・参観時・事後の記録用
2	●教育実践プレ演習 活動の手引き ●フレンドシップの手引き(選択、ファイル)	…子どもとのふれあい体験や先輩の実習の参観等 …野外宿泊体験活動へのボランティア活動体験等
3	●教育実習必携 ●教育実習のしおり ●教育実習録	…実習全般に関する留意点や心得等 …各附属校からの実習に関する具体的事項 …実習の内容等に関する記録
4	●教職実践演習 基本テキスト	…教職実践演習の全体像と各演習等での内容

学生にチームで対応できる運営体制を維持している。

(3) 香川大学における初年次教育の全学共通コンテンツ

本学においても、大学教育開発センターが中心となって検討を進め、2012(平成24)年から「大学入門ゼミ」という科目を設定し、初年次教育の柱に据えた。「大学入門ゼミ」の前身となる「教養ゼミ」は、「1年次の学生を対象とし、特定のテーマに関して担当教員の指導のもとに少人数の学生が共同で教育学習するゼミナール形式の授業」であり、平成6年度から効果的な初年次教育プログラムを継続的に模索してきたものであったが、「教養ゼミ」の実績を生かし、メリットを残しつつ、「大学入門ゼミ」にすることによってより初年次教育の充実を図ろうというものであった。

この「教養ゼミ」から「大学入門ゼミ」になるにあたって、「大学生・社会人として必要な知的技法の基盤の育成」という目的のもと、「ノートのとり方」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」「日本語技法①」「日本語技法②」という5つの内容を、香川大学生に求められる基礎的なスキルとして定め、担当者がこれらを授業の中で指導することを原則とする、という方針となった。(巻末の資料1を参照)

そして、それまで「教養ゼミ」で目指されていた「学部混在型の知的交流」がはずされ、学部ごとの必修科目とされたため、「全学共通コンテンツ」に加えて、専門分野の基礎的な内容も「学部共通コンテンツ」として加えることになり、「学部共通コンテンツ」の具体的なものはもちろん、「全学共通コンテンツ」についても、具体的な内容や扱うスキルの軽重はそれぞれの学部任せられたことになった(佐藤 2011)。ただし、全学共通コンテンツは新生に必要基本的なスキルであるため、「大学入門ゼミ」の開講学期は1年次の前期とすることが求められた。つまり、基本的なスキルの習得を図りながら、高等学校と大学における学び方の違いをつなぎ、大学での学修がスムーズにスタートしてほしいとの願いを込めて、入学後の初年次前期において全学共通で実施されている。

(4) 履修カルテと学びの見通しをもつ初年次教育

教育学部に入学後、できるだけ早い時期に「教員になりたい」という意欲を喚起することは重要である。教育学部学校教育教員養成課程では、平成22年に「教職実践演習」の導入に合わせて「教師になるための学びの計画と履歴」(履修カルテ)を作成し、学生一人一人に配付し、4年間に渡って継続的な使用を行うこととした。

1年次に「教師になるための学びの計画と履歴」を配布し、香川大学教育学部が設定した「教師に求められる5つの資質能力」(教職への使命感、対人能力、子ども理解、指導力、探究心)の提示、その5つの資質能力それぞれに複数の評価の観点を示し、1年次修了後から4年次の教職実践演習まで6回にわたって自己評価を記入していくことにしている。また、学生には、それ以外に表1の通り、実地教育に関する冊子が配付されるが、4年間に渡って継続的に活用していくのが、「教師

になるための学びの計画と履歴」である。

これらの5つの資質能力に関しては、より具体的な観点で4年間を通して自己評価しながら、学びの履歴を確認し、自らの向上を自覚できるように意図されている。さらに、その過程を通して、めざすべき教員像に関して多様な観点から課題設定や自己評価等の場が設けられている。例えば、平成26年度に学校現場等からの声を参考に、めざす教員像「さぬきうどん型教員」のイメージ図も初年次の授業から提示しながら、自らのめざす教員像をより具体的なものとして構築できるように学生を支援している。

(5) 実地教育に連動するカリキュラムの見直しと強化

また、初年次の授業科目においても、本学の強みである特別支援教育の特色をカリキュラムに明確に位置付けることとなった。1年次に発達支援を理解し教育実習等での適切な指導ができる力量形成を意図して、「発達支援論」や「特別支援教育基礎論」を必修とした。

この特別教育基礎論においては、1年生全員が附属特別支援学校を訪問し、「発達支援論」や「特別支援教育基礎論」で学んだことと実際の学校現場での様子に関連させて学ぶ貴重な機会となる。附属特別支援学校を参観した学生の感想を紹介する。(平成26年度)

「学生A：電子黒板が多用されているのが一番印象的でした。視覚的にすぐわかりやすいし、生徒自身で操作してその反応がすぐにあるので達成感にもつながっているのかなと思いました。お金を数える授業は、日常生活でお菓子を買う場面を設定し、授業を進めることで、より実感を持ってとりくめる、目的を持って取り組めると思いました。」

「学生B：自分のイメージでは、すべてのことに関して子どもたちが行動することには先生の補助があるものだと思っていた。だが、実際行ってみると、自分でできそうなことはできるだけ自分で努力してさせようとしていた。障害があるからといって何でも手伝ってあげることが先生の仕事ではなく、最小限の補助で子どもたちを成長させることが大切だということに気付かされた。」

さらに、平成27年度入学時から、小学校コース、中学校コースの設定に伴い、「初等授業研究」や「学級経営論」を位置付けて必修化した。特に、大量採用に伴うなかで学級担任としての準備と力量形成により一層力を入れるとともに、実践的指導力の定着をめざしながらカリキュラムを見直してきた。

(6) 郷土の特色を生かした改善～「二十四の瞳との出会い学習」～

1年次には、前期に全員共通受講の「大学入門ゼミ」、後期に教職概論を、全体での講義や各クラス編成を活用した演習的なグループワーク、附属学校園訪問等を取り入れながら実施している。ここでは伝統的に実施されてきた小豆島合宿に関する改善について述べる。

まず、前年度の小豆島合宿に関する課題として以下のような点があげられていた。

- ①センター以外の担当教員は2年ごとに各コースで入れ替わり、引継ぎが十分でないコースも見られる。
- ②入学1か月後の合宿なので、人間関係を深めることは大切だが、小豆島に行っているだけで、学んでいない学生も多くいるのでは。もったいない。
- ③小豆島合宿での内容が毎年少しずつ変更しており、ねらいと内容を明確にする必要。より効果的にするのであれば、事前学習の充実などを。
- ④香川で教員養成をしているのだから、地域の特色であり香川の宝とも言える「二十四の瞳」や壺井栄について、せめて知っておいてほしい。

表2 平成26年度 二十四の瞳との出会い学習

時期	平成26年度 二十四の瞳との出会い学習の内容
4月	単行本「二十四の瞳」を一人一冊配布 DVDで「二十四の瞳」を視聴後、教員より講義・解説
5月	小豆島で1泊2日の1年生全員の合宿 岬の分教場 映画村 壺井栄文学館訪問 文学館館長より講話 大学の先輩で小豆島に勤務する若手教師に学ぶ 先輩からの体験談 ～輝く瞳の子どもたちとともに～
7月	レポートにまとめる「〇〇と教育」「めざす教員像」



【小豆島で先輩からの体験談】

そこで、担任会議等を繰り返して改善案として、次の3点が示された。

- 小豆島合宿での各班の学生に任せるフィールドワークは取りやめて、全学生が岬の分教場、壺井栄文学館を訪ねるようにしたい。
- 事前に映像と図書を通して二十四の瞳について理解しておくようにしたい。
- できれば、先輩であり小豆島に勤務している若手教員と交流の時間をとりたい。

上記のような課題や改善案を踏まえて、平成26年度における改善として、例年実施の小豆島合宿を事前・事後学習の充実を図り、より郷土の特色を生かした「二十四の瞳との出会い学習」として位置づけた。その概略は下記の表2の通りである。実際に小豆島に行く前に、事前学習として各自が単行本「二十四の瞳」を読み、DVDによる映画視聴や教員による講義や解説を聞く機会を設けている。その後、岬の分教場や映画村、壺井栄文学館等を巡り、館長さんの講話を拝聴することも実施している。そのことを自らのめざす教師像を考える一つのステップとしている。(資料1を参照)

特に、見学地としている「岬の分教場」は、観光地として全国から教師をめざす学生や教師になったばかりの若年教員だけでなく、ベテラン教員も含めて、多くの教育関係者にとっての訪問地である。分教場に置かれているノートには、ここを訪れた様々な理由が記されていた。教師をめざそうと思った理由、教師になったが心が折れそうになり訪れたという思い、自らの初心を確認するために来たという経緯、大石先生のように子どもとのふれあいを大切にしたいという決意など、まさに、教育の聖地としての役割を担っているのである。現在も香川大学教育学部では、教員養成課程の一年次生を対象に「二十四の瞳 出会い学習」として、小豆島での学びの場を位置づけている。単行本を読み、DVDを視聴した後のある学生の感想を紹介する。

・・・大石先生は悩んでいる子どもに対して、とても親身な相談や対応、問題解決の手助けになるような行動をすぐにとっている。子どもに一人で悩みを抱え込ませるのでなく、手を差し伸べて一緒になって解決に向かおうとする姿勢が重要だと改めて学んだ。時代も環境も違うが、一人一人に目を向け、親身に対応するということは、教員に限らず、今の自分たちにもできることで、今後の人生においても大切な要素だと感じたので実行できるようにしたい。・・・卒業した後でも自分に会いに来てくれる、恩師と慕ってくれる生徒がいるというのは教師としての一番の幸せだろう。こんな教師になれるだろうか？自分次第だと思うが、大石先生は目標である。これからの教師をめざすための覚悟になった。

1年生なりに子どもと教師のかかわりや愛情、教職の魅力を感じている。このような事前学習を踏まえて、小豆島を訪問することは、ただ見学するだけでなく、大石先生の姿を通して、自らのめざす教師像を模索したり、なぜ自分は教職をめざそうとしているのかを見つめ直したりする貴重な機会として位置付いている。

(7) 教職概論における改善～先輩の模擬授業体験と現場教員の多様な声を聞いて～

1年次の後期に実施される教職概論においては、平成27年度から校種に応じた一部選択型の講義・演習内容の導入や附属校訪問と関連させた内容の柔軟な見直し等も試みた。

ここでは紙面の都合により、校種毎に先輩の模擬授業体験を実施した後の学生の反応を紹介する。

「模擬授業の子ども役をやってみて(平成27年度)」

「学生1：自分が今日のような授業が本当にできるのか、とても不安になりました。先輩たちの模擬授業を受けて、先輩たちはすごいなと思った。自分もあんな風に教えられようになりたい。」

「学生2：中学生のころに戻った気分になりました。特に自分の専門にしたい社会に関しては、パワーポイントを使ってわかりやすく面白い授業でした。話し方、教材、雰囲気など様々な要素から授業は成り立っているんだなあと思いました。」



【グループでの演習活動】

4. 成果と課題

(1) 初年次教育の改善の成果

1) 教職員の協働による教員養成の意識

教員養成のスタートである初年次の実地教育に関する授業科目を複数の教員がチームの意識を持って学生の支援にあたることは、学部全体にとっても大きな好影響があると言える。コースや領域を超えた協力体制をするだけでなく、学生一人一人を互いに理解しサポートしようとする教員同士の協働意識の芽生えにも寄与していると言える。そのことは、問題の先送りをしない雰囲気を形成してきている。改善に取り組んできた間、いきなり大きく変えるのではなく、できることを小さく一歩ずつ改善してきた。各教員が担任会議や授業反省の場等で自由に議論する中でよりよさをめざす意識を大切にしてきた。例えば、各教員間の情報共有や学生への各クラスでの伝達方法等、である。それは、コース・領域を超えた教員が複数関わることで、任せられるところと揃えるところを共通理解して授業や学生指導にあたることを通して具体的に改善されてきた。

2) 高大接続を意識した共通コンテンツの成果

アカデミック・リテラシー習得の場としての「大学入門ゼミ」における共通コンテンツの指導が数年かけて定着してきたことも成果と言える。高校から大学への進学で学びの方法に大きな戸惑いを感じる学生も少なからずいる。全学共通コンテンツを学んだことが、新入生の大学の講義やレポート等に対する不安の軽減につながっていることは、学生自身の授業評価や感想等からも多く見られる。学生の授業後の感想を一部紹介する。

「授業を受けてレポートへの不安が軽くなった。特に、構成において、問題提起や根拠、データ等をあげて結論となる最終的な主張を書いていく方法などが参考になった。」

「ノートの取り方もいろいろと工夫があると驚いた。教員をめざすうえで、情報や書類の整理も大切だと理解できた。日々の授業に生かしていきたい。」

このように、高等学校と大学での学び方の違いをつなぐことに生かされてきたとともに教員にとっても指導方法や演習を取り入れることが定着してきた。

3) 1年次に生きた教材として生かせる力の活用

学生の感想に「院生さんの話やビデオレターは現場の生の声をきけてすごく貴重なものだ、子どもと早く現場に出て触れ合いたいと素直に感じた。」とあるように、4年生の模擬授業体験への協

力、交流人事教員や現職派遣院生の協力など、まさに生きた教材として大きな影響を与えていた。大学内に多くの生きた教材として活用できる方々がいる。特に、香川大学では平成15年度に人事交流制度により交流人事教員を採用し、多様な場で教員養成に携わる機会を設けて、協働してきた。このことも定着して大きな成果と言える。

(2) 初年次教育に関する今後の課題

課題もいくつか挙げられるが、何よりも組織の継続性と活性化していく体制づくりを誰がコーディネータ役になってもできるようにしていくことである。ペーパーに表れない面での配慮や事前の調整等、大勢の教員が動く時には、組織としての意識をいかに各々が育んでいくか、難しい課題である。

次に、附属学校園等での体験と大学における座学の連携をアクティブ・ラーニングも意識して充実を図ってきたが、よりよいものにしようとするれば、時間が必要であり、限られた中でクラスの全員が集まることには限界がある。教員の側が何をどこまで求めるのかといった、目標とすべき基準の共有化の難しさを痛感している。

さらに、定着してきた共通コンテンツの内容を見直していく際に、例えば高校の先生の声を反映させるなど、高大接続を生かした改善につなげていきたいと考える。また、時間的な問題では、現在、クォーター制が全学共通科目等において議論され、導入の方向性が示唆されている。このような時間的な枠組みと内容の問題も今後は再検討が迫られる。

【引用・参考文献】

- 文部科学省、2008、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築について（審議のまとめ）」平成20年3月、pp.35. 同上、pp.36
- 教育再生実行会議、2015、「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について（第七次提言）」、平成27年5月14日、pp.4-6.
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容等の改革状況について（平成25年度）」文部科学省、平成27年9月10日
- 国立大学法人島根大学教育開発センター「初年次教育プログラム」<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fyep/>（平成27年3月閲覧）。
- 国立大学法人島根大学教育学部附属教育支援センター「全国初の1000時間におよぶ体験学修の必修化」<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/aces/center/1000h.html>（平成27年3月閲覧）。
- 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）平成20年3月25日
- 霜川正幸、2015、国立大学教育実践研究関連センター協議会教育実践・教師教育部会提案発表資料「山口大学ポートフォリオ実施実情と課題」
- 香川大学教育学部附属教育実践総合センター研究プロジェクト事業の「教育実習を軸とした4カ年を見通した実地教育プログラムの改革に関する研究プロジェクト」提案資料
- 佐藤慶太、2011、「教養ゼミナール」から「大学入門ゼミ」へ、香川大学教育研究第8号、pp.28-30

資料1：今年度の大学入門ゼミ(H28前期)の年間計画(学生配付用)

2016(平成28)年度 前期 1年次「大学入門ゼミ」授業計画

回	月・日(曜日)	内 容
1	4月11日(月)	(全体) オリエンテーション・授業説明 学生憲章と大学生としての自覚 コース・領域振り分け説明 611 ----- クラス別 顔合わせ・委員選出等 1組 421 2組 423 3組 427 4組 428 5組 524 6組 523 7組 522
	4月13日(水) 3時間目終了後引き続き	『二十四の瞳』映画鑑賞 415
2	4月18日(月)	一日研修事前指導 『二十四の瞳』から考える「教育とは？」 幼・中参観校希望調査 611
3	4月25日(月)	[共通コンテンツ①] 情報整理の方法 1~4組 432 5~7組 421
4	5月02日(月)	[共通コンテンツ②] レポートの書き方 1~4組 432 5~7組 421
5	5月07日(土) or 08日(日)	一日研修(小豆島) 主校: 担任組を引率、副校: 何れか1日引率。 2016/05/07(土) 2組、3組、5組、7組 2016/05/08(日) 1組、4組、6組
6	5月09日(月)	[共通コンテンツ③] 日本語技法 1~4組 432 5~7組 421
7	5月16日(月)	[共通コンテンツ④] プレゼンテーションの方法 1~4組 432 5~7組 421 ----- 5/18(水)13:00~14:30…(希望者のみ)図書館ガイダンス
8	5月23日(月)	学校参観事前指導 611
9-A	5月30日(月)	中学校参観 (Aグループ/B: 幼稚園参観学生は小豆島研修の代休)
10	6月06日(月)	中学校参観 振り返り・情報共有 1組 421 2組 423 3組 427 4組 428 5組 524 6組 523 7組 522
11	6月13日(月)	小学校参観
9-B	6月20日(月)	幼稚園参観 (Bグループ/A: 中学校参観学生は小豆島研修の代休)
12	6月27日(月)	学校教育入門 ・授業の基礎基本(授業のミカタ) ・言語活動と思考を大切にした授業とは 611
13	7月04日(月)	振り返り 1組 421 2組 423 3組 427 4組 428 5組 524 6組 523 7組 522
14	7月11日(月)	発表の準備 1組 421 2組 423 3組 427 4組 428 5組 524 6組 523 7組 522
15	7月25日(月)	発表 授業評価 その他(コース・領域振り分け説明等) 1~4組 432 5~7組 421